

聖書：コリント人への手紙第二 12：1～10

説教題：弱いときにこそ強い

日時：2025年3月16日（朝拝）

パウロは「愚かなことですが」と断りつつ、これまで自分を誇る話を続けて来ました。クリスチャンにとって自分を誇ることはあり得ないこと、考えられないことです。誇る者はただ主を誇れ！がモットーです。そのパウロが誇っているのは彼を攻撃する偽教師たちが誇っていたからです。彼らは自分たちの強さ、成功、雄弁さを誇り、それに比べてパウロは弱く、苦難の中にあり、話は大したことがないと批判していました。あれは神によって立てられた使徒とは言えない。我々の方がはるかに勝る！と主張していました。そんな偽使徒、偽教師たちにコリント教会は動かされつつありました。この状況を放置すれば、せつかく神を信じ、福音を受け入れたコリントのクリスチャンたちが別の教え、別の福音に持って行かれてしまいます。その結果、コリントにおけるパウロのこれまでの働きは水の泡と化してしまいかねません。そこで彼はやむを得ず偽教師たちと同じ土俵に上がります。そしてコリント人たちに耳を傾けてもらうために自分を誇る話をしているのです。

1 節の「私は誇らずにはいられません」とは、私は誇らなければならないという義務感からの言葉です。それはコリント人のためです。それは無益なこと、ナンセンスなことです。しかしコリント人を取り戻すためにパウロは語り続けます。そしてここで「主の幻と啓示の話に入りましょう」と言います。

パウロがこの話をするのは、偽教師たちがこの種のことを誇っていたからです。自分たちがどんなに特殊な霊的体験をしたか、恍惚状態を知っているか、異常な神体験をしたかについて語り、それによって自分たちは霊的な人間であると主張していたからです。それでパウロも同じ話をここでするのです。

その話とは 14 年前に第三の天にまで引き上げられたことについてでした。ここでパウロは「私はキリストにある一人の人を知っています」と言いますが、これは誰のことでしょう。これはこの後の 5 節や 7 節を考慮するとパウロのことだと分かります。なぜパウロはこんな言い方をしたのでしょうか。それはこの特別な体験に伴うかもしれないうぬぼれから距離を置くためです。パウロは自慢したくありません。ですからこ

の体験をしたのは自分なのですが、そういう自分を客観的な立場から見ているのです。そしてその人を「キリストにある一人の人」と表現することによってクリスチャンの誰に起こってもおかしくないこと、他の人にも起こり得ることを暗示しています。自分を特別視しないように、別な言い方をすれば控え目に彼はこの体験について語るのです。

さて第三の天とは何でしょうか。これは天を三つに分けるユダヤの考え方に基づいているようで神が臨在される最高の天を指すようです。このあと4節で「彼はパラダイスに引き上げられて」と言われますが、そのパラダイスと同じでしょう。イエス様は十字架上で一緒に張り付けにされ、イエス様を信じた強盗の一人に「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と言われました。ですからこれは一言で言えば天国のことです。パウロは生きていながら天国を見る経験をさせられたのです。それは「肉体のままであったのか」、「肉体を離れてであったのか」、私は知りませんと彼は言います。3節でも同じ内容が繰り返されています。つまりパウロは本当に知らないのです。これは彼の無意識の内に行われたこと、ただ神がなされたことだったのです。彼はそこで言い表すこともできない言葉を聞きました。人間の言葉では表現できない、人間の言葉を越える、あまりに偉大で神聖な言葉を聞きました。またそれは「人間が語ることを許されていない」ともあります。啓示されたことがあまりに神聖であるため、軽々しく口に出してはいけなく、いや決して口にしてはならないという内容であるということです。私たちとしては「それではさっぱり分からない。何かもう少しなのか」と思いますが、もしパウロが少しでもヒントを出したら、語ってはならないという禁令を破ることになります。ですから言えないわけです。

言えないならなぜ触れるのかと思うかもしれませんが、彼はもともとこの話をするつもりはありませんでした。今回の状況がなければ自ら話すことはありませんでした。しかしどうしても語らなければならない状況があるため、話ただけです。これについて話すことは決して愚かではないというのが6節前半の意味です。それは本当のこと、事実だからです。しかしパウロはそれを得意気に語ることはしません。「だれかが私を過大に評価するといけなくないので」と彼は言います。こういう話は人々に驚きをもって受け止められがちです。ですから話す方も、こういう話によって自分を持ち上げることができます。自分はこんなにも普通の人が経験しないような特殊な経験をした。そのことを話して、私は霊的な人間だとみんなに知ってもらいたい。高く評価しても

raitai。しかしパウロの考えはそれと全く逆です。彼は他の人が自分を過大に評価することを望みません。むしろパウロのいつもの姿を見て、また彼のいつもの言葉を聞いて判断してもらいたい。ですから「私は誇ることを控えましょう」と言います。彼はそのために細心の注意を払って、この体験をした自分と距離を取って語って来ました。むしろ私自身については弱さ以外には誇らないと5節で言います。ここからもし私たちが神との間で特殊な経験をしたとしても、それは神と自分の間でだけ持っていれば良いということをお教えられます。それをことさら人々の前に披露し、さも自分は霊的な人間だと思ってもらおうとする態度はパウロの姿勢と反対であると覚えるべきです。時々盛んに証しと称して自分の特殊な体験を得意気に話す人がいますが、それは聖書の立場からずれたものと言わざるを得ません。

さてこのパウロの体験に関する話は強さを誇るよりも、弱さを誇ることにつなげるためのものであったことが続きを読むと分かります。7節に「その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました」とあります。この「肉体のとげ」とは何でしょうか。ある人は他の手紙から分かるようにパウロの目の病気だったのではないかと考えます。またある人はパウロを見る人が思わずつまずきそうになる彼の外見的損傷のことではないかと考えます。その他、マラリア、てんかん、精神的疾患、鬱、苦悩、迫害など色々な推測・提案がなされていますが、正確なところは良く分かりません。「肉体の」と言われていますから、これは体と関わる何らかの問題だったのだろうと多くの人は見ます。また「とげ」と言われていることからすると、いつも体に痛みを覚えさせ、肉体に突き刺さるような感覚を与える障害だったのだろうと思われま

それは「私を打つためのサタンの使い」と言われています。思い起こすのはヨブ記です。サタンはヨブを攻撃し、彼を滅ぼそうとしたように、パウロに対しても襲いかかって来ました。しかしヨブ記と同様、サタンの活動は神が許可したレベルまでしかできません。神こそが主権者です。ここでも「肉体に一つのとげを与えられました」と受身形で語られていますが、これは神の受動態と呼ばれる表現と考えられます。つまりこれを与えたのは神です。また「与える」という言葉はギフトという意味の言葉です。つまりこの肉体のとげはサタンの使いであると同時に、より本質的には神のギフト、パウロを祝福するための神の特別なプレゼントと言うべきものだったのです。

パウロはこれを自分から去らせてくださるように三度主に願いました。思い起こすのはゲッセマネの園におけるイエス様の祈りです。あそこでもイエス様は、この杯を取り去ってくださるように三度祈ったことが福音書に記されています。パウロもあのイエス様のように繰り返し、また激しく祈ったのです。そんな彼に対する主の答えが9節前半にあります。「しかし主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである』と言われました。」 肉体のとげを去らせてくださいという祈りに対して、主は取り去るという形で答えてくださる場合もあるでしょう。しかしそれだけが神の方法とは限りません。そのとげはそのまま、それを乗り越える力を与えることによってその祈りに答えるという道も神は持っておられます。今回のパウロの祈りに対する神の答えはそれでした。パウロとしてはこの肉体のとげはない方が良く考えました。ない方が主のためにより良く働けると思いました。しかし主はある方が良くされました。その際、約束を与えておられます。それは「わたしの恵みはあなたに十分である」という約束です。この「十分である」という言葉は現在時制で語られています。ですからいつでもあるということです。常に絶えず十分なのです。ですから肉体のとげによる弱さを覚えても、常に十分な主の恵みに支えられ、主の力によって、より勝る働きをすることができるということです。私たちは自分が強いと思うと自分に頼って神に頼らなくなり、また高慢になりやすい者です。その結果、神の力による働きができない者となります。しかし弱さを覚える中で真に神により頼むようにと導かれます。するとそこに私たちの弱さを補って余りある神の力が現わされるようになります。そうして「神のわざ」が行われて行きます。これが神の方法であるということです。

パウロはこうして9節後半から10節にかけて結論を述べます。ここから二つのことに注目して今日のまとめとしたいと思います。一つ目としてパウロは9節後半で「ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」と言います。11章30節でも「もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります」と言っていました。この「弱さを誇る」という言い方は人間的には不思議な表現です。普通私たちは誇るなら強さを誇ります。自分の長所、優れた点を誇ります。偽教師たちはまさにそうでした。自分たちの立派さ、人間的能力を誇っていました。そして彼らがより劣ると見なすパウロを見下していました。しかしパウロはこのような彼らの考えをここで全く退けているわけです。「弱さを誇る」とは、「強さを誇る」とする彼らの言い方のパロディです。こうして偽教師たちの考え方

を全く嫌悪し、退けているのです。真理はその逆です。弱さを誇るというのは、そこからキリストの恵みが入り、キリストの力がおおうからです。人は弱さを覚える時、神により頼み、神の恵みを経験します。ですから 12 節最後にあるように「私が弱いときにこそ、私は強い」となるのです。自分に絶望した時こそ、その人の前にはただ神の恵みによって強くされる世界が開かれます。自分が無力だと感じる時こそ実は主がくださる強さに生きるように招かれている時なのです。

私たちは果たしてどうでしょうか。また教会もどうでしょうか。ともすると教会でも強い人であることが求められ、技能を持った人、能力のある人、地位のある人、色々な意味で力ある人が尊ばれ、賞賛されるということはないでしょうか。また教会全体として自分たちは強いと自負している教会に出会うことはないでしょうか。そういう人や教会と接したり、話をしていると、何か自慢話を聞かされているだけのよう思う場合もあります。そしてそのレベルに達していない人や教会を見下しているような発言を聞く時もあります。もしそうだとしたら、それは偽教師たちと同じ道を行っていることとなります。主の前で誇ることは私たちにとってあり得ないことです。それは嫌悪すべき考えです。愚かなことです。もし私たちが誇るとしたら自分の弱さを誇るだけです。それはイコール神の恵みと憐れみを誇ることです。私たちはこのことを心に留めて、誇るという愚かな行為を決してしないようにしたいと思います。誇るなら自分の弱さを誇り、ただ主に私たちの望みがあることを覚えて、主により頼み、主にすべての栄光を帰す歩みへ進む者とされたいと思います。

そしてもう一つ注目すべきは 10 節です。「私が弱いときにこそ、私は強い」という言葉は、弱さを覚える私たちにとって慰め深い言葉です。しかしこれを普段は自分の強さに頼っておきながら、弱さを感じた時の気休めの言葉にしてはなりません。10 節前半にこの真理は「キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜ぶ」という歩みとセットであることが述べられています。これとのつながりで 10 節後半の「私が弱いときにこそ、私は強い」という言葉を理解しなければなりません。キリストに従う歩みには 10 節前半にあるような「弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難」といった歩みが伴います。偽教師たちはこのような歩みを軽蔑していました。しかし十字架へと進まれた主の足跡に従うクリスチャンの歩みにも、逃げようとしなければ、同じ歩みを用意されています。その道を行く人にとっての慰めの言葉なのです。主に倣って主の足跡に従う道は弱い道、人々から見下される道、苦しい道でもあります。しかしそこ

でその人は決して見捨てられないということを言っているのです。そのような弱い状況においてこそ、その人は強い。主の恵みは十分です。ですから恐れずに 10 節前半に示されている道へ進んで行くべきであるという結論へ私たちを導くものでなければなりません。私たちも主に真に従うなら、その前にはこのような苦難の道があるはずです。その中で私たちは弱さを覚え、無力であると感じ、絶望の気持ちを持つかもしれません。しかし私が弱いときにこそ私は強いのです。そこで主により頼み、主に支えていただくことができます。このことを思うなら私たちはどんな困難な道も、主が導かれるのであれば進むことができます。主の恵みはいつも十分です。そのことを信じ、感謝して、主に従う道を喜びと希望をもって進む者とされたいと思います。そういう中でこそ、主の十分な恵みを豊かに味わう者とされたいと思います。そして私たちの弱さの内にご自身の力を完全に現される主によって、主だけを誇り、主にすべての栄光を帰す私たちの歩みを導かれて行きたいと願います。